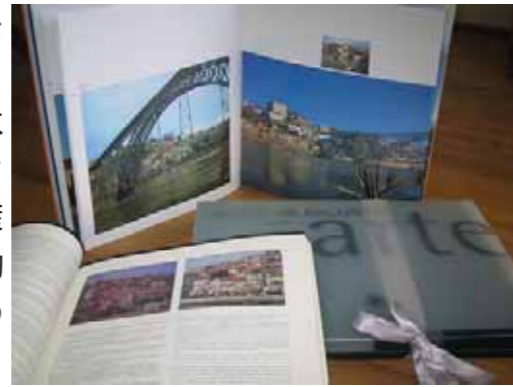


ロ川上流から河口のポルトまでのクルージングが人気を博し、ポルトと共に観光の相乗効果が現れている。さらに古いものだけでなく、ワインをはじめとする経済効果は大きい。ポルトでは世界遺産登録に対して、市、ポルトワイン協会などそれぞれ別々に活動を続けていたが、世界遺産登録される3年前からユネスコも含め組織化をして活動した。またユネスコ、大学、経済人の団体が集まり、本の編集をし完成した。(その本は尾道市と経済同友会に寄贈された)一気に気運が高まった。



世界遺産登録になったことは自信になったが、維持することは大変なことだ。観光や古いものの保存に力を入れ住んでいる人への対応も必要である。若者が30年前から古い地区から離れた。若者は古い家に住むのは難しい。従って大学も新しい地区に移動した。家主も60年前から部屋代を上げるのは難しいという状況にある。また住民への保障も必要である。古いものを残すための条例を制定し、国が60%、市が40%を負担して、個人所有物を買収することにした。

ポルトが世界遺産登録になって、ドウロ川めぐりの150万人を含めて年間450万人の観光客が増えた」であった。

最後にカブラル氏は「ポルトが世界遺産登録までに約10年かかっているのだから、尾道も早くアクションを起こした方が良い」とアドバイスがあった。

## 世界遺産視察 (その3)

### ポルトガルは世界遺産がいっぱい

この視察の主な目的地はポルトであったが、ポルトガルには12の世界遺産がある。ポルト歴史地区の他にも世界遺産の視察を行った。

次に訪れたのはバターリヤ修道院である。正式名称は「勝利の聖母マリア修道院」と言われ、1388年に着工。その後、代々の王に引き継がれた。ゴシック様式とマヌエル様式が入り混じったポルトガル独立を象徴する壮大な修道院である。この修道院は100年の年月をかけて建てられたが、いまだ未完成である。1983年に世界遺産に登録されている。



リスボンではジェロニモス修道院とベレンの塔である。ジェロニモス修道院は、マニエル1世がエンリケ王子が建てた礼拝堂の跡地にエンリケ航海王子の偉業を称え、またヴァスコ・ダ・ガマのインド航路発見を記念して16世紀初めに建造された。中庭を囲む55mの緻密な彫刻を施された2階建ての回廊は繊細優美で大航海時代の栄華を象徴したマヌエル様式の建造物である。



ベレンの塔はテージョ川の船の出入りを監視する要塞として16世紀初めに建てられた。

大航海時代、故国にたどり着いた船を迎えたのはベレンの塔であった。今はジェロニモス修道院のそばで陸続きとなっている。世界遺産には1983年に登録されている。

世界遺産ではないができるだけ古い街並を視察したいと考えていたので、大学を中心に発展した文化都市コインブラを訪問した。

コインブラに初めて大学が置かれたのは1308年のことで非常に古い格調高い大学である。

18世紀初めに建てられた図書館は金箔を施したバロック様式の建物で大航海時代の遺産である約50万冊の本があり閲覧も可能である。

この町は丘の上のコインブラ大学を中心として発展し、ポルトガルの歴史の中で果たした役割は大きい。



ポルトガルでは政治のリスボン、商工業のポルトに次ぐ文化のコインブラと言われ、第3の都市である。さらに漁師の町ナザレを訪れ、時間の関係で町の中までは入れずシティオ展望台から町の中心のプライア地区を見るにとどまった。次いで中世の城壁に囲まれた人口800人の小さな町オビドスに着いた。城壁の全長1.5kmでゆっくり歩いても30分もあれば一周できる。オビドスは小さな家が建ち並び、赤茶の屋根に白の壁、さらにオビドスの旗の2色(青と黄)で部分的に彩色されて美しい。ブーゲンビリアやゼラニウムで彩られた路地を歩くと、まさにおとぎの国である。こんな町も世界にはあるんだと感激させられた。

